

生涯教育¹としての日本語教育の現状分析

—ソウル市内の老人福祉館を中心として—

張 栄 花*

1. はじめに

国際交流基金日本語国際センターの2003年の調査によれば、韓国では6,231の教育機関が存在し、894,131人の学習者が日本語教育を受けており、日本語教師数は3,333名であるという。また韓国の日本語学習者数は全世界の日本語全体学習人口の37.9%を占めており、世界第一位となっている。これらの調査で把握されている学習者数以外にも、韓国には潜在的な日本語学習者の数が非常に多い。

日帝強制占領期時代を経験した71歳以上の高齢者たちは、この「潜在的な日本語学習者」と言えるだろう。韓国の71歳以上の高齢者たちは初等教育、長くは中等教育を、日本語によって受けた人々である。さらに、日本語(=外国語)という意識なしに日常生活で日本語を頻繁に使用していると言う。ハン・ジョンファ(2004)¹の研究によれば、日常生活における日本語使用頻度に関する質問に対し、60代が72.58%、70代が60.00%の頻度を現わした。このような日本語使用頻度に関して過去日本語学習経験のない高齢者たち(60代)が日常生活で日本語学習経験がある高齢者たち(70代)より高いという研究結果を通じて、韓国社会で日本語は学習経験の有無にかかわらず親しい外国語というのを確認することができる。また実際に現在、韓国では、多くの高齢者向けの教育機関で生涯教育プログラムとして日本語教育が

行われている。よって韓国の高齢者たちにおいて日本語教育は他の外国語より、教育プログラムとして発展可能性が大きいと考えられる。

しかし、現在、韓国の高齢者教育機関で行われている日本語教育は教育的な観点より福祉と余暇時間活用等に重点を置いたもので、教育プログラムとして機能していないのではないだろうか。したがって、潜在的な日本語学習集団と言える高齢者たちを新しい日本語学習集団として設定し、彼らのための日本語教育理論や教育課程などを研究する必要があると考えられる。しかしながら、高齢学習者向けの日本語教育に関する研究は日本語教育分野では緒に就いておらず、先行研究が見当たらない。そこで、本研究では高齢者教育分野及び生涯教育分野の先行研究を中心に教育理論と教育課程を模索していく。

2. 研究方法

2.1 先行研究の分析

高齢者教育に関する先行研究と現存の高齢者教育プログラムを参照にして、韓国の高齢者を対象とした日本語教育の問題点を把握する。そして、高齢者を対象とした日本語教育を行う際に考慮しなければならない点については、高齢者教育学分野の理論的背景を参考にする。

2.2 韓国内の福祉館の日本語教育の現状

福祉館協会ホームページに登録されている福祉館を中心に電話調査及び福祉館ホームページ²を

* 同徳女子大学大学院院生

参照にし、教育プログラムとして日本語教育プログラムの授業内容、授業日数・時間等を調査した。

2.3 参観授業³

ソウル市にある3か所の福祉館で参観授業を行った。参観した授業は、各福祉館の初級レベルの授業と中級レベルの授業で、計2回ずつ実施した。

授業内容と教育環境、学習者の授業に対する態度と反応、教師の指導法、教材、授業資料等を中心に記録した。

2.4 インタビュー

① 高齢学習者とのインタビュー

各福祉館で30人ずつ、65歳以上の高齢学習者を対象でインタビューを実施した。インタビュー調査に協力してくれた学習者数は全部で90名である。

インタビューは予備調査の結果を基にして、15個の項目を先に設定した後、その項目の内容に重点を置いて質問する形式で行った。1対1の個人面談の形式で時間制限を設けず自由に話をしてもらおうという形式でインタビューを進めた。インタビュー内容を録音することに抵抗を感じるという調査協力者がいたので、インタビューは2名で行い、一人がインタビューし、一人がインタビュー内容を記録するという形を取った。

② 日本語教師とのインタビュー方法

教師たちに対するインタビューまた予備調査の結果を基に質問内容を設定して実施した。インタビュー調査に協力してくれた教師数は4名である。

3. 研究内容

3.1 福祉館の日本語教育現況分析の結果

2008年、現在、韓国全土に177ある福祉館の中で日本語教育が行われている福祉館の数は114ヶ所で、全体の70%が日本語教育を実施しているこ

とが分かった。教育プログラム内容であるが、日本語初級組と中級組で構成している福祉館の数が最も多かった。これ以外に、日本語高級(=上級)、日本語会話、日本語小説、日本文化研究、日本歌演習、日本文化研究会、新聞日本語、日本語応用などを開設している福祉館もあった。

韓国人講師が授業を担当している福祉館が殆どであったが、韓国人教師と日本人教師が授業を担当している福祉館も3か所のみ存在した。授業回数は週2回が最も多かったが、週1回や週3回に授業をするという福祉館もあった。

3.2 A, B, C福祉館の参観授業内容

いずれの福祉館でも出席に非常に厳しく、出席率の高い学習者が優先的に次の授業に参加することができる資格が与えられた。

教師らは学生たちにストレッチングをさせたり、面白い話をしたり、日本の歌を歌うなど、高齢学習者たちが退屈せずに授業に参加するように努力していた。

学習態度については、中級授業に参加する学習者たちが積極的で、文法中心の授業より会話中心の授業に多くの学習者たちが積極的に参加していた。

年齢が高めの学習者たちの特徴は、流暢な発音、日本語に対する自信、積極的な授業参加等であった。また、年齢が低めの学習者たちは携帯電話電源を消しておく、隣りの人と騒がないことなどマナーが良く、課題の遂行能力が高いという特徴が見られた。

3.3 インタビュー調査の内容

① 高齢日本語学習者へのインタビュー

インタビューに協力してくれた高齢学習者たちの学習動機は、71歳以上の学習者たち(総51名)の場合は、過去日本語を学んだ経験がある学習者が多く、再び日本語を学べるようになったという意見が多かった。一方、71歳未満の学習者たち

(総39名) の場合は、‘学ぶということ自体がとても楽しい’ という意見と ‘日本観光のため’ という意見が多かった。

学習ニーズについては、高齢学習者の身体的な特徴を配慮した教育環境改善、多様な学習資料の提供及び多様な教育カリキュラム構成などを求めている学習者が多かった。日本語の熟達度については、この日本語教育の直接的な効果と解釈するには多少無理があるだろうか、‘自信を持つようになった’、や ‘これからの目標が生じた’ など、学習者たちの人生に日本語教育が肯定的な効果を与えているということが分かった。

これらのインタビューの結果から、学習者たちの多くがボランティア、日本旅行、日本語講師など、実生活で日本語を使いたいという実用的な目標を持っているということを知った。

② 教師へのインタビュー

ボランティア精神により福祉館で日本語を教えているという教師が殆どで、日本語を教える時、韓国の高齢学習者たちが過去に日本語学習経験があるという点が大いに役に立つと言っていた。

また教師の役目として重要だと考えていることは、知識のみを伝達する指導方法だけではなく、高齢学習者の特性を理解し学習者たちを人格的に敬い、配慮する心を持つことだと言っていた。そして、多くの教師たちが学習者たちを退屈させないような授業方法に関する研究をしているものの、教育プログラムの開発、教材分析及び資料収集など、高齢学習者のための専門的な教育に関する研究は別途行っていないことが分かった。

現在、実施されている日本語授業に対しては、教育環境改善及び学習者の習熟度別学習のための多様な日本語教育のカリキュラムに対する開発が必要であると考えており、政府と教育機関の支援が必要だという意見も提示された。

4. 研究結果

以上を通じて、高齢学習者を対象にする日本語教育に対する全般的な現況が明らかになった。

本研究を通じて、韓国の福祉館で行われている高齢者対象の日本語教育が生涯教育として価値のある教育プログラムとして発展するためには、多くの改善点が必要であることを確認することができた。すなわち現在実施されている日本語教育は高齢学習者に対する十分な研究が行われてこなかったため、教育内容が教養を身につけるためや余暇活動のためのものに留まり、これ以上の発展がないと思われる。

本研究で明らかになった高齢者対象の日本語教育の問題点は、以下の6点である。

- ① 高齢学習者のための日本語教育において、専門的な教育方法に対する研究が成り立っていない。
- ② 現在、日本語授業に参加している高齢学習者の日本語習熟度を体系的に分類するための具体的な方法がない。
- ③ 現在、福祉館で日本語を教えている教師たちは高齢者教育のために専門的・体系的な教育を受けていない。
- ④ 学習資料及び学習プログラム構成が、高齢学習者の学習ニーズにできていない。
- ⑤ 学習者の学習ニーズを満たすことができるような学習目標が具体的に提示されていない。
- ⑥ 福祉館の教育環境が、高齢学習者に対する配慮が足りない。

韓国において高齢学習者を対象としている日本語教育が生涯教育として十分な役割をするためには、このような問題点たちを改善していかなければならない。また日本語教育が、現在の高齢者のみを対象に実施されるわけではなく、将来的に、高齢者になるいわゆる「高齢者予備軍」を対象として教育の範囲を広げる必要もあるだろう。したがって、価値ある生涯教育プログラムとして日本

語教育を発展させるためには、以上の問題点を解決しなければならないのである。

5. 改善案及び考察

研究結果を通じて、高齢学習者を対象にする日本語教育について考えていかなければならない改善案は、次のように要約することができる。

- ① 高齢日本語学習者の日本語実力を体系的に分類することができる方法に対する研究が必要である。
- ② 高齢学習者の身体的・心理的特性及びそれ以外の学習者の個別的な特性に対する調査を通じて、高齢学習者を十分に理解したうえで日本語教育プログラムを開発しなければならない。
- ③ 高齢学習者の学習ニーズを反映した学習資料を開発し、自らで利用することができるようにしなければならない。
- ④ 日本語教育を受けた 高齢学習者たちが実際に日本語を使うように日本語教育の実用化のための研究が必要である。
- ⑤ 高齢学習者のための専門的な講師の養成が必要である。

高齢化社会⁴において、高齢者のための教育に対する研究は活発になされなければいけない。したがって、高齢学習者のための教育プログラムとして日本語教育が活性化されれば、日本語教育はもちろん高齢者教育の質的向上に大いに役立つだろう。

これまで高齢学習者のための外国語教育において体系的かつ専門的な教育内容が存在しなかったため、日本語教育研究の分野で高齢学習者を対象にした体系的かつ専門的な教育プログラムを開発及び発信していくことにより、英語や中国語など他の外国語教育分野でも、その成果を発揮することができるのではないだろうか。本研究を通じて多くの高齢者たちが日本語を学んでいること

が確認できたが、これは日本語教育が今後、生涯教育プログラムとして韓国社会で発展していく可能性があることを示唆している。本研究では生涯教育プログラムとして日本語教育がこれから考えていくべき改善案の提示のみに留まったが、今後は、本研究の改善案を土台として、高齢学習者のための日本語教育プログラムの開発や高齢学習者の評価基準の考案など、具体的かつ実用的な方面において研究を続けていきたい。

注

- 1 한정화 (2004), 「한국어 속에 사용되는 일본어계 외래어에 관한 고찰- 부산지역을 중심으로-」 부산대학교 교육대학원 석사학위논문 p15
- 2 www.kaswcs.or.kr
- 3 参観授業：学校で学父母または教育関係者に教師の指導方法や学生の学習活動を見せるための授業
- 4 高齢化社会：全体人口の中で65歳以上の高齢人口が7%～14%以内の社会

参考文献

- 차경문 (2006) 노인교육의 현황 및 활성화 방안 연구 —대학부설평생(사회)교육원을 중심으로— 한서대학교대학원 석사학위 논문 pp10~11
- 최선경 (2006) 「농촌 노인을 위한 영어교육프로그램 개발 및 평가, 한서 대학교 대학원 석사학위논문 pp7~8
- 한정란 (2005) 『노인교육의 이해』 학지사
- 한정란외 (2006) 『세계의 노인교육』 학지사
- 한정화 (2004) 「한국어 속에 사용되는 일본어계 외래어에 관한 고찰-부산 지역을 중심으로-」 부경대학교 대학원 석사학위논문 p15
- 허정무 (2000) 『노인교육 이론과 실천 방법론』 향서원
- 허준강 (1997) 「한국노인교육프로그램 평가에 관한 연구」 광운대학교박사 학위논문 p64
- 허준강 (1997) 「노인교육프로그램에 관한 사례연구」 『단국단행논집』 단국대학교 행정대학원 p64
- 홍성기 (1999) 「노인교육의 과제와 방향-사회복지 현장에서 본 노인교육의 과제와 방향」 한림대학교 사회복지대학원 제19회 워크숍 자료
- 纒坂英子 (2007) 『韓国にいける日本語教育』 三元社
- 林さと子外 (2006) 「ことばを学ぶ一人ひとりを理解する第二言語学習と個性性」 春風社

교육부 (1999) 『평생교육백서 제3호』